

産業革命期における北部フランスの繊維工業

服部春彦

〔要約〕フランス革命が最も徹底的な市民的変革であつたにも拘らず、その後のフランス資本主義の発展が必ずしも順調でなかつたのはいかなる理由によるのであろうか。これは既に多くの先学によつて論じられながら、なお十分に説明されていない問題である。本稿はこの問題をフランス産業革命史の側から検討する。考察の範囲を北部フランス、リール地方の繊維工業に限定したのち、まずこの部門の工場制への移行の画期と形態を分析し、繊維産業資本の確立過程の諸特質——即ち、産業資本の発展のテンポの緩慢さ、発展の規模の狭小さ、商人資本の主導的役割——を具体的に明らかにする。次いで、これらの諸特質がどのような客観的諸条件によつて規定されていたかを、繊維工業の資本蓄積の様式、生産手段の供給、労働力の存在形態、市場構造の四つの側面から考察するが、それはフランス産業資本の独自の発展構造に対して若干の光を投じるものとなるはずである。

一 問題の限定

本稿は産業革命期における北部フランス繊維工業の実態分析を通じて、フランス産業資本の発展構造の一端を明らかにしようとするものである。

まず私の産業革命史研究の問題意識を簡単にのべておこう。従来わが国の多くのフランス史研究者によつて論じら

れてきた問題に次のようなものがあつた。フランス革命が最も急進的で徹底した市民革命であつたにもかかわらず、その後のフランス資本主義の発展が必ずしも順調でなかつたのは、一体どのような理由によるのかという問題である。この問題に対しては、フランス革命の徹底性を強調するわが国の革命史家によつては、これまで説得的な解答が与えられていない。のみならず、この問題は河野健二氏が正当

にも指摘されたように、フランス革命との関連でのみ取扱われるべきものではなく、産業革命期の経済構造の分析を通じて解明されるべきものである。しかるにわが国のフランス経済史研究は、これまで主として大革命以前の時期に集中され、一九世紀に坎んする研究はきわめて少ないのである。私の産業革命分析の主たる目的は、こうした研究の空隙をうずめつつ右の問題に対して一定の解答を与えようとする点にあるが、同時にそれは、フランス革命の経済史的意義と限界についても若干の照明を与えるものとならう。

ところで、フランス資本主義の発展のテンポないし規模の問題は、ひとりわが国のみにかぎらず、諸外国の歴史家によつても活発に論じられつつある。たとえばアメリカの経済史家 R・E・キャメロンは、フランスが一九世紀初頭にヨーロッパの最強国であり、農業資源の点では第一位、工業生産においてもイギリスに次いで第二位を占め、また一九世紀の大部分を通じて資本・技術・制度的条件・企業家精神等の点で後進ヨーロッパの経済的發展に大きく寄与しうるほど恵まれていたにもかかわらず、二〇世紀初頭になると、工業総生産においてイギリスのみならずアメリカ

とドイツの後塵を拜するに至つた理由を、経済成長論の観点から検討している。^④かれによると、その原因は資本や技術の不足にあつたのではなく、工業生産物に対する総有効需要 (aggregate demand) の不足と、いくつかの基幹産業における生産コストの相対的高さが、工業成長に対する主要な障害であつた。^⑤またイギリスの経済史家 W・O・ヘンダーソンも、フランスの工業発展のテンポをイギリスやドイツよりも緩慢にした要因として、人口増加の緩慢さ、石炭の不足と高価格、工業投資の不足、大量生産技術の未発達、高関税による政府の国内工業保護等をあげている。

しかし、これらの諸研究は、フランス資本主義の構造的特質の歴史的究明というわれわれの課題に即してみれば、なお十分満足すべきものとはいいがたい。キャメロンの研究は、全ヨーロッパ的な連関の中でフランス経済の成長、その工業化の過程を考察し、そこにみられる特質をいくつかの要因の相互連関の帰結として説明しようとした注目すべき試みではあるが、しかしかれにあつては、当然のことながら社会的生産関係の視点が欠けているために、国民所得、工業総生産等の指標によつて国民経済の量的成長は解明さ

れていても、経済の質的（構造的）な変化は把握されていないのである。他方、C・フォーランの研究を初めとする近年のフランス実証史学の諸業績は、特定地域・特定産業部門の生産構造の変化を精密に追跡してはいるが、それらの部門の国民経済全体の中への位置づけが明瞭でなく、またその分析視角に特定のひずみがみられるために（すなわち、これらの駆使する「商業」金融の集中」、「技術的集中」、「統合」等の用語が示すように、そこで問題とされているのは経営組織の発展であつて小営業→マニユファクチャー工場という生産形態の段階的進展ではなく、従つてまた産業資本の原始的形成と資本の集積・集中とが往々混同される結果になつている）、フランス産業資本の体制的確立の時点、またその確立過程の特質についてそこから明確な解答を期待することはできない。このようにみると、さきの問題に接近するためには、われわれはどうしてもわれわれ自身の方法によらなければならぬことになる。すなわち、まずフランス実証史学によつて与えられた歴大な史実をマルクス主義史学の諸概念によつて再構成しながら、フランス産業資本の確立過程とこの特質を具体的に把握し、次いでキャメロン等の成長理

論史学の成果をも摂取しながら、経済構造の変革が何故にそうした形をとつて行われたかを、いくつかの要因の組合わせの結果として多面的かつ動態的に明らかにしなければならぬであろう。

以上のようにわれわれの課題を設定した上で、次にどのような順序で産業革命の分析を進めていくべきだろうか。ここで、フランス産業資本の確立過程においていかなる産業部門が主導的役割を演じたかが問題になつてくる。この点についてJ・ロムは、個別研究の成果を要約してこうのべている。^④一八三〇—五〇年の二〇年間には綿工業に代表される繊維工業が、「付加価値」の点でも成長率の高さの点でも諸部門中第一位をしめていたが、世紀の半ばごろから製鉄業と鉄道業とが最も強力な刺激を経済発展に対して与えるようになり、さらに資本需要の増大にともなつて銀行業が第三の主導産業として現われる、と。ところで、ロムによると繊維工業における技術的変革が最も密集しているのは、第二帝政期、とくに一八六〇—七〇年の間であつた。^⑤またわれわれは、かのW・W・ロストウの経済成長段階説からもこの点についてある手掛りをうる事ができる

ように思う。かれは、一國の經濟全体の規則的成長の達成
——「離陸」take-off——のためには、その原動力として一
またはそれ以上の製造業部門の急速な成長が必要であると
みるが、しかしこの主導部門の型は國によりきわめて多様
であり、イギリスではそれは綿織物工業であつたが、ドイ
ツ、フランス、アメリカでは鉄道を基盤とする重工業の複
合体であつたとする。すなわち、これらの國においては、
鉄道網の急速な成長が石炭・鉄・機械に対する需要をよび
おこし、かくしてこれら基幹産業部門の發展をもたらしつ
つ經濟の自己維持的成長を可能ならしめたというのである^⑧。
以上の二つの見解をあわせ考えるならば、われわれはフラ
ンス産業革命の展開過程について一まず次の点を想定する
ことができよう。すなわち、この國においては産業革命は、
イギリスにおけるように軽工業（繊維工業）→重工業（石炭・
製鉄業）→鉄道業という順序で継起的に進行したというより
も、むしろこれら三部門における決定的、変革が時間的にほ
ぼ平行して行われたことであり、かつその場合、鉄道業お
よび重工業の發達が繊維工業の發達に対して決定的な影響
をおよぼしたことである。従つてわれわれの分析は、産業

革命以前の段階における基軸的産業であり、また少なくとも
も産業革命の前半期において主導的役割を演じたとみられ
る繊維工業から出發すべきであるが、その際この部門だけ
を切離して取扱うのではなく、他の諸部門との有機的關連
をたえず念頭においておく必要がある。

次に、繊維工業における産業資本確立過程を考察するに
あたつてとくに北部を対象地域として取上げる理由を簡單
にのべておこう。一九世紀中葉のフランス繊維工業の地理
的分布の特徴は、いぜんとして工業中心地の分散であるが、
繊維工業の三大地帯と呼びうるものは、ノルマンディ、東
部のアルザスとヴォージュ、および北部のフランドルとピ
カルディであつた^⑨。これらのうちノルマンディと東部とが
ほとんど綿工業（紡績・織布・捺染）に専門化していたのに
対し、北部では羊毛・亜麻・綿などさまざまな工業部門が
一定の均衡を保ちつつ並存していた^⑩。ところで、近代織
維工業の確立過程の主軸をなしたものはいうまでもなく安
価な大衆消費用織物を生産する綿工業であるから、われわ
れはまず東部もしくはノルマンディを取上げるべきだと思
われるかもしれない。にもかかわらずあえて北部を対象と

すものには、一つには当面利用しうる文献が最も豊富なためであるが、より積極的な理由としては、他ならぬこの地域において、のちに明らかにするようにフランス繊維産業資本の確立過程の諸特質が集中的に示されていると考えられるからである。とはいえ以下の考察は北部全体をおおむめのではなく、その最大の繊維工業中心地であったフランスのリエール地方にかなするものにすぎない。それはかつての特権都市リエール Lillie と、農村工業町より上昇したルーヴロンbaix、トルロモン Tourcoing、マルマンタイエール Armentières との四つの工業都市を結ぶ四辺形として示される地域であり、そこには前述のような種々の繊維部門の均衡と相互補充の典型的な姿が認められたのである。

- ① 河野健二「フランス革命と資本主義」『経済論叢』八六〇—三）
- ② Rondo E. Cameron, *Economic Growth and Stagnation in France, 1815-1914*, The Journal of Modern History, vol. 30, 1958, pp. 1-3; do, France and the Economic Development of Europe, 1800-1914, pp. 41, 64, 502-503.
- ③ Cameron, *Economic Growth*, p. 11; do, France and the Economic Development, pp. 503-504.

④ W. O. Henderson, *The Industrial Revolution on the Continent: Germany, France, Russia, 1800-1914*, 1961, pp. 5-6, 91-95.

⑤ 河野健二 Cl. Fohlen, *L'industrie textile au temps du Second Empire, 1956*, pp. 444-466; B. Gille, *Recherches sur la formation de la grande entreprise capitaliste (1815-1848)*, 1959, chap. II et III 参照。

⑥ J. Lhomme, *La grande bourgeoisie au pouvoir (1830-1880)*, 1960, p. 137.

⑦ *ibid.*, pp. 176-177. 同様の見解はキマヤ女史によっても提出されている。cf. E. Mossé, *Marx et le problème de la croissance dans une économie capitaliste*, 1956, pp. 138, 180, 194-195, 200.

⑧ W. W. Rostow, *The Stages of Economic Growth*, 1960, pp. 39-40, 52-58 (木村健康他訳『経済成長の諸段階』五三一—五五、七一—七九頁)。

⑨ Fohlen, *op. cit.*, p. 161.

⑩ *ibid.*, pp. 193, 203, 223, 499-504.

⑪ *ibid.*, pp. 224-235; A. Lasserre, *La situation des ouvriers de l'industrie textile dans la région lilloise sous la Monarchie de Juillet*, 1952, pp. 11, 72.

II 繊維産業資本の確立過程とその特質

1 工場制移行の画期 繊維工業における工場制度の成立

過程は次の二つの局面をふくんでいる。すなわち、一つは従来の分散的作業場内部における作業機の採用と普及であり、いま一つは作業機の改良に大型化によつて必然化される動力機（とくに蒸気機関）の使用と生産の集中である。そしてこの第二の局面に至つてはじめて、われわれは近代の工場経営の成立について語る事ができるのである。J・L・ダンセットは前者を「機械化」mechanisation、後者を「動力化」motorisation と名づけているが、いまリール地方の繊維工業の主要二工程（紡糸・織布）についてこの二種の変革が行われた時点を表示すれば、第1表のようになる。以下この表に即して若干の説明を加えよう。

見られる通り、全部門中最も早く「機械化」を開始し、また完了したのは綿紡績業である。この部門はリール、ルーベの二都市とその周辺農村で主として行われていたが、一八世紀末、とくに一八〇〇年以後「ジェニー紡績機」jennies が農村地域に導入され、急速に手紡車を駆逐して行つた。しかし、強力な動力を必要としないこの紡績機は旧来の生産方法をほとんど変革しなかつたばかりか、かえつて農村家内紡績業の残存を支える有力な一因となつた。

第1表 Lille 繊維工業の工場制移行の画期

部門別	1830年 以前	1830— 1840年	1840— 1850年	1850— 1860年	1860— 1870年
綿	←紡績の機械化→	←紡績の動力化→			
		←織布の機械化と動力化→			
羊毛		←紡績の機械化と動力化→		←織布の動力化→ (とくに1857—66年)	
		←紡績の機械化と動力化→		←織布の動力化→ (とくに1860—70年)	
亜麻		←紡績の機械化と動力化→		←織布の動力化→ (とくに1860—70年)	

これに対して、一七九八年にリールに出現してしだいに普及した「ミュール・ジェニー紡績機」multi-jenny は、「動力化」への酵母を含み、生産手段の一定の集中をひき起こす。こうして綿紡績は一九世紀初頭以来しだいに都市の作業場

(ateliers) に集中されていったが、そうした作業場の多くは二〇〇〇錘以下の小規模なものであり、水力を利用しえないこの地方では一八二〇年頃までほとんど専ら人力または馬力によつて運転されて

第2表 Lille 綿紡績業の発展

年次	企業数	錘数	1企業平均錘数
1808	22	不明	1,000—3,000 通例
1832	50	180,606	3,600
1848	34	239,445	7,040
1849	27	231,010	8,550
1856	39	370,630	9,500
1859	43	501,224	11,650
1869	31	495,492	15,980
1899	20	1,000,000	50,000

て動力機を装備しない小アトリエは生産価格の点で機械制工場に太刀打ちできなくなり、六〇年頃後者の勝利が確定する。いま、綿紡績業における工場数（アトリエを含む）、総紡錘数、および一工場当り紡錘数の推移をリール市について示せば第2表のようになる。これによると、綿紡績の飛躍的發展がみられたのは作業機が普及し終つた一八三〇年以後、とりわけ四九—五九年の間であり、一万錘以上の大工場が圧倒的優位をしめるに至つた一八五九年を以て蒸気機関が動力として確立したとみてよいであろう。

いた。蒸気機関を装備した真の機械制工場が一般化するのには三〇年代以降のことである。その促進的契機となつたのは四〇年頃輸入された「自動ミュール紡績機」renvidourの普及であつた。こうし

ルーベを中心とする羊毛紡績業は一八世紀末以来衰退の一途を辿つていたが、一八三〇年頃から再び発展に向つた。この部門は綿紡績とは異なり、農村家内労働ないしは小規模アトリエの形態をほとんどとることなしに初発から蒸気機関をそなえた工場制工業として建設されるのが通例であつた。しかし、紡毛業の生産規模のめざましい拡大がみられるのは、梳毛工程の機械化と自動ミュールの使用が一般化する五〇—六〇年代のことである。ルーベとトゥルコワンの羊毛用紡錘数は五六年の約二〇万錘から六一年には約三〇万錘に増加して両市の綿紡錘数を凌駕するに至り、さらに七〇年には五九万錘に達した。われわれはほぼ一八三〇—六〇年をもつて羊毛紡績業における工場制度の確立期とみなしえよう。亜麻紡績業では、「機械化」は技術的困難のため最も遅れたが、三四年にフランス人フィリップ・ド・ジラルルの発明にかかる紡績機 moutier Girard が英国から逆輸入されてのち四〇年代に急速に進行し、六〇年頃には手紡車はほとんど完全に消滅するに至つた。これと平行して、「機械化」の初期にみられた小規模なアトリエは、蒸気機関を装備し紡錘数・紡錘回転数にまさる機械

第3表 Lille 亜麻紡織業の発展

年次	企業数	錠数	1企業平均錠数
1836	12	2,500	240
1843	13	32,000	2,460
1848	44	108,000	2,450
1857	105	273,460	2,630
1862	65	191,000	2,940
1865	72	231,000	3,210
1866	79	249,000	3,150
1868	60	191,000	3,180

制工場によつて駆逐されていく。⑩ 亜麻紡糸業の発展をその密集地帯であつたリール市とその周辺について示せば第3表の通りであつて、われわれはその最も顕著な発展がみられた五〇年代の末をもつてこの部門が工場制への移行を完了したとみる事ができよう。

次に、織布工程の「機械化」「動力化」は紡糸工程に比して多かれ少なかれ遅れを示している。まず毛織物業は、七月王政期にルーベを中心をめざましい成長をとげたが、それに与つて力があつたのは、第一帝政期に発明された「ジャカル織機」*métier Jacquart* が三〇年頃この部門に導入

され、種々の交織など複雑な織物の安価な製造が可能になつたことである。⑪ この織機は三五年二五〇〇台、三八年六〇〇〇台、三九年には八〇〇〇台以上と急速に普及していつた。しかしそれは蒸気機関

の設置を必要としなかつたので、都市または農村の小アトリエへの生産集中をもたらしただのみで機械制工場の創設には導かなかつた。⑫ 工場制への移行は五〇年以後、とくに五七―六六年の間における「力織機」*métier mécanique* の急速な普及をまたなければならぬ。六〇年には手織労働者（家内またはアトリエの）と工場労働者の比が一一対一であつたのが、六六年にはほぼ一対一になつたことは、市場供給能力の点でこの部門における機械制工場の決定的優位を示すものであろう。⑬ 亜麻織物業の工場制移行は三部門中最も遅れて開始され、その進行も緩慢であつた。四〇年代に導入された「飛杼」*navette volante* は紡績におけるジエニーと同様、生産形態の变革に導かず、むしろ旧来の分散的織布経営の基礎を強化した。⑭ 力織機をそなえた機械制工場はリールには三八年に出現したが、この部門の大地アルマンティエールにおいて工場制への移行が最も急速かつ広汎に行われたのは、一八五〇―七〇年、なかならず六〇―七〇年の間である。⑮ 一八七〇年にノール県全体において力織機の数が手織機の三分の一（約一万台）に達したことは、前者が後者の数倍の生産能力を有することからみ

て、工場制亜麻布生産がすでに優位をしめるに至つたことを明示するものといえる。最後に綿織物業においては、早くも二〇年代に飛杆が導入され、七月王政期にはいくつかの機械制織布工場が出現した。^③しかし、この部門はリール地方ではもともとその比重が小さい上に、ルーベの綿・毛交織布生産を除いて五〇年以後いちじるしく衰退したため、工場制確立過程については詳細を明らかにしえない。

以上各部門ごとに分析したところを総括すれば、リール地方の繊維工業における工場制移行の画期は一八三〇年より七〇年に至る約四〇年間であり、中でも紡糸諸部門の「動力化」が飛躍的に進んだ五〇年代と、織布諸部門において「力織機」の優位が確定した六〇年代とが決定的に重要であるといえよう。ほぼ第二帝政期に当るこの二〇年間でこそ、リール地方における繊維産業資本の確立期だつたのである。

さてそれでは、このような工場制度への移行はいかなる形態をとつて行われたのであろうか。次にこの問題を工場制移行前夜における繊維工業の経営形態と工場制度を成立せしめた主体との、二つの側面から考察することにした。

① J. Lambert-Dansette, *Quelques familles du patronat textile de Lille-Armentières (1789-1914)*, 1954, pp. 9-10. この点はつとにマルタスの指摘するところである。「単独な作業機が協業あるいはマニユファクチャに代位する限りでは、かかる作業機自身が再び手工業経営の基礎となりうる。だが、機械に立脚しての手工業経営のかかる再生産は単に工場経営への過渡をなすにすぎぬのであつて、工場経営なるものは、概していえば、機械的動力——蒸気または水——が機械の運転において人間の筋肉にとつて代わるやいなや、いつでも現われるのである」。「資本論」、長谷部訳、日本評論社版、第三分冊二九八—二九九頁。

② 本表は Lhomme, op. cit., p. 176. の表を参考にしつゝ、以下にあげる Lambert-Dansette, Lasserre の研究に基づいて作成した。

③ Fohlen, op. cit., p. 228.

④ Lambert-Dansette, op. cit., pp. 11-12, 74-76, 152-153, 155.

⑤ *ibid.*, pp. 12-14, 155. シキニー機の紡錘数二一五〇に對し、シキニー機は一台で一〇〇—二〇〇錘を運転してつた。Mossé, op. cit., pp. 200-202.

⑥ Ch. Ballot, *L'introduction du machinisme dans l'industrie française*, 1923, pp. 141-142.

⑦ 一八三二年にリールの五〇の綿紡工場中一七が既に蒸気機関を裝備されてつた。Lambert-Dansette, op. cit., pp. 183 n.

- 148, p. 544; Fohlen, op. cit., p. 226.
- ⑧ Lambert-Dansette, op. cit., p. 13.
- ⑨ *ibid.*, p. 186 n.151. への借用。
- ⑩ J.-A. Roy et J. Lambert-Dansette, *Origines et évolution d'une bourgeoisie : le patronat textile du bassin lillois (1789-1914)*, Revue du Nord., n° 148, 1955, p. 206, n° 153, 1957, p. 21.
- ⑪ Lasserre, op. cit., p. 28.
- ⑫ Fohlen, op. cit., pp. 343, 451, 464.
- ⑬ Lambert-Dansette, *Quelques familles*, pp. 16-17; Lasserre, op. cit., pp. 38-40, 60.
- ⑭ Lasserre, op. cit., pp. 25-26.
- ⑮ 次の典拠による。Fohlen, op. cit., pp. 230, 320-321, 404; Lasserre, op. cit., pp. 60-61; Lambert-Dansette, *Quelques familles*, p. 114, n. 5.
- ⑯ Lasserre, op. cit., pp. 49-50, 64-65.
- ⑰ *ibid.*, pp. 66-67.
- ⑱ *ibid.*, pp. 64-65.
- ⑲ Fohlen, op. cit., pp. 339, 341, 459. ルーヴの毛織用の力織機は第二帝政末には約一万台に達したが、これは全国の力織機の半数である。*ibid.*, pp. 339, 343. だがそれにもかかわらず手織機は長い間広汎に残存した。七八年にルーベの一三五人の織元は一万二千台の力織機とともに、なお一万五千台の手織機を使用していた。Roy et Lambert-Dansette, *Origines et évolution*, Revue du Nord., n° 153, 1957, p. 23.

- ⑳ Lambert-Dansette, *Quelques familles*, pp. 21, 74, 76, 202 n. 11, 458.
- ㉑ *ibid.*, pp. 63, 79, 212-213, 232, 238 n. 88.
- ㉒ Fohlen, op. cit., p. 463. 六〇年には力織機は五一六〇台にすぎなかった。但し、工場制への移行がほぼ終るのは漸く一〇年頃のことが多く。Lambert-Dansette, *Quelques familles*, p. 210.
- ㉓ *ibid.*, pp. 20 n. 21, 201 n. 9.
- ㉔ *ibid.*, pp. 248-249, 253-254; Roy et Lambert-Dansette, *Origines et évolution*, Revue du Nord., n° 148, pp. 204-206; Lasserre, op. cit., p. 70.

二 工場制移行の形態 前節でのへたところからも推察されるように、繊維工業における工場制移行の形態には紡糸工程と織布工程とで小さからぬ差異が認められる。それ故われわれは、両者の関連に留意しつつもこれらを一応別々に論じようと思う。

そこで工場制移行前夜の経営形態からみていくことにする。まず紡績業では、前述の三部門のうち一八世紀末前工場制生産との明確な断絶の上に工場制生産が発した羊毛紡績業はひとまず視野の外におくことができるから、問題は綿と亜麻である。

綿紡績においては前述のようにミューール紡績機の導入を契機として農村の独立小営業と問屋制家内労働が急速に都市または農村の集中作業場 (ateliers) に取つて代わられていった。こうしてはぼ一八〇六—一八〇八年より工場制移行が本格化する二・三〇年頃までの間、このアトリエが綿紡績業の支配的な経営形態を形づくることになる。^①それは一口にいつて、「動力機＝蒸気機関を備えていない工場」であるが、通例一〇〇〇—三〇〇〇の紡錘と四〇—一五〇人の労働者とを有し、まれにはリールの Fauchille 家やトルコワンの Desarmont 兄弟のアトリエのように紡錘数四〇〇〇以上、労働者数一〇〇人以上に達するものもあり、工場制出現以前の集中職場としてはかなり大規模なものであつた。ところでこの綿紡績作業場は、ルーベとトルコワンのではしばしば有力な織元の経営の一環として編成されていたのに対して、リールでは通例独立の経営をなしていたのであるが、^②いずれの場合にもその労働者数からみて、作業場内において資本制的協業が成立していたことは明らかである。さらに、このような規模の作業場において、開綿・打綿・梳綿・紡糸等の部分工程への労働者の専門化を通じ

て分業原則が多かれ少なかれ導入されていたことは、十分推察される場所であるから、われわれはこの綿紡績アトリエをもつて資本制、マニユ、ファクチャと規定して誤りないであろう。

次に亜麻紡績においても、一八一〇年から三〇年頃にかけて資本制的作業場の形成がみられた。その中には、一八一年にリールに設立された Graclet-Cuvillon のアトリエのように紡錘数八〇〇、労働者四〇人を数えるものもあつたが、大多数は一二〇錘程度、雇用労働者八—九人の小規模な作業場であつた。^③われわれは、綿紡績の場合に比べて一層萌芽的であるとはいえこれを資本制、マニユ、ファクチャと規定しうるであろう。ただしこの部門では、三五年以降の本格的な「機械化」過程が一般に「動力化」と工場建設とを随伴しながら進行したために、アトリエの多くはきわめて過渡的な存在にすぎず、速やかに機械制工場に転化するか、さもなくば工場との競争によつて没落する運命にあつた。^④したがつてアトリエ（＝マニユファクチャ）が、工場制に直接先行する経営形態として支配的に行われたとはみなしがたいのである。

それでは織布業の場合はどうであらうか。まず、ルーベを中心とする毛織物業では、一八三〇年頃のジャカール織機の採用によつて複雑な上質織の製造が可能になると、織元 (fabricants de tissus) は品質管理の必要上かれらの下請生産者へ家内労働者の一部をルーベ市内または周辺農村の集中作業場に集合させ、職場長 *contre-maitre* の監督の下においた。こうした作業場内労働者の数は時とともに増加したが、しかし他方において織元は、固定設備投資の節約、景気変動への対応の必要、とりわけ農村賃金の相対的な低さのために、農村の織布工を原料および織機の前貸を通じて問屋制的に支配することを有利としたのである。^⑧ 三年の一史料によると、作業場外の家内労働者の数は作業場内労働者の約四・五倍に達し、また後者は前者よりも三分の一だけ多くの賃金を獲得するとされているが、こうした家内織布工の圧倒的優勢は四八年についても確認される。^⑨ したがつて、工場移行前夜における毛織物業の経営形態の特質は、大多数の企業の内部において集中職場経営 (マニユファクチャ) と問屋制前貸 (資本制家内労働) とが結合されていたこと、そして両者のうち問屋制前貸が生産規模の点

で支配的比重をしめていたこと、であるといえよう。

ところで、ルーベの毛織物業者の営みは単に織布工程における集中職場経営と問屋制前貸のみに留まらなかつた。

かれらは原料 (織糸) 入手の便のために、当時工場制に移行しつつあつたルーベとトゥルコワンの紡毛業者に羊毛を前貸して自己のために賃加工させるか、あるいはよりしばしば自ら紡毛工場を経営したのであり、さらに時には、準備 (梳毛) 工程と仕上 (染色) 工程においても他の工場もしくは作業場を支配・併合することによつて、全製造工程を縦断的に結合する巨大な経営 (フランス史家のいわゆる「垂直的集中」) を出現させることさえあつたのである。羊毛と綿の加工のために梳毛・紡糸工程においては工場を織布工程においては工場・アトリエ・問屋制前貸をあわせ営んだルーベの *Delattre* 父子会社はその典型的な一例である。^⑩

次にアルマンティエールの亜麻織物業についてみると、一九世紀前半にそれは主として近隣農村において、独立小営業 (*artisans independants*)、問屋制家内労働 (*salariat a domicile*)、小アトリエの三種の経営形態で営まれていた。^⑪

すなわち三〇年頃には、すでに二五—三〇名の問屋織元 (négociants または marchands-fabricants) が都市および農村の家内織布工を自らのために働かせていたが、この時期にはなお独立小生産者による織布経営がいぜんとして大きな比重を占めていた。^⑭しかるに、四〇年頃より紡糸工程の「機械化」と工場集中が進行するにつれて、これらの独立小織元はそれまで自給していた原料（亜麻糸）の供給をリールやアルマンティエールの織物商人に仰がざるをえなくなり、そのことを通じてしだいにかれら問屋商人層の下請生産者→資本制家内労働者に転落していくことになる。^⑮問屋商人 (négociants) なし織物業者 (fabricants de toiles) と呼ばれる人々の数が四六年に三八—四〇人、五四年には五三人^⑯、さらに手織布の発展が頂点に達した六〇年には七五人と増加していることは、独立小織元の家内労働者化の進行を物語るものにほかならない。ところで、この過程に並行して起つたいま一つの重要な現象は織布労働のアトリエへの集中であつた。まず、紡糸工程の機械化→織糸改良の結果問屋織元が上質織生産に向かうようになる、かれらの家内織布工の一部は中心作業場に集中され、より嚴重な

監督の下におかれることとなつた。^⑰他方、農村の小織元（「独立もしくは下請生産者」）の職場規模の拡大の中からも、小規模な資本制的作業場が分出されるに至つた。^⑱こうして二様の経路で形成された織布作業場は、五—六台から二〇台程度の織機を集積しつづ、糸巻・整経・織布等の諸工程を賃労働者を主体とする「分業にもとづく協業」によつて遂行する資本制マニユファクチャであつた。だがわれわれは、毛織物業と同様亜麻織物業においても、こうした集中職場経営のしめる比重を過大評価してはならないであろう。織布マニユファクチャは、それが小生産者と問屋商人とのいづれによつて形成されたにせよ、まさしく農村の独立小営業と問屋制家内労働との広汎な基礎の上にそびえ立つていたのである。^⑲

最後に、ルーベ、アルマンティエール等の綿織物業においてもほぼ同様の事情を看取することができる。この部門でも一九世紀初頭より四〇年代にかけて、問屋制家内労働の広汎な展開の中から数台の織機を設置する小規模なマニユファクチャが分出されたが、しかしそれらは全綿織生産を支配するにはほど遠かつたのである。^⑳

以上に考察したところから、われわれはリール地方の織維工業の工場制移行前夜における経営形態について次の三点をひとまず確認しようと思う。すなわち、第一に、主要工程たる紡績および織布に関するかぎり、マニユファクチャ―集中職場はいわゆるマニユ段階から大工業段階への過渡期において、当該部門または他部門における一定の技術的変革（『作業機の導入』）を前提としてはじめて本格的に展開したと、第二に、しかもこうしたマニユファクチャ―が全生産を支配するに至つた部門は綿紡績のみであり、とくに基軸工程たる織布部門では、マニユ段階の末期においてすら独立小営業および問屋制家内労働の比重が圧倒的に大きかつたこと、第三に、ルーベの羊毛工業を除いてこの地方では、紡績と織布の両工程を一貫して経営する典型的な織維工業マニユファクチャ―が原則として存在しなかつたこと、である。そして、もしこれらの点が承認されるとするならば、英仏両国においては、織布工程の集中職場を中核とするマニユファクチャ―が市民革命から産業革命に至る時期に全機構的に形成されたとみるわが国で有力な学説は、修正されなければならないであろう。

第4表 Lille-Armentières 紡績
工場建設者出身階層別

部門別	卸売商人	小売商人	産業者	労働者	官自由職業	合計
綿紡績	17	1	7	2	1	28
亜麻紡績	25	2	18	2	0	47

さてそれでは、これらさまざまの経営形態の併存の中から工場制度を成立せしめていつた主体は、どのような経済的規定性と社会的系譜とをもつ人々であつたか。次にこの問題を簡単に検討することによつて、織維工業における工場制移行過程の特質を一層明らかにしておくこととしたい。まず、リール・アルマンティエールの紡績業について一八〇〇—一七〇年の時期に機械制工場（またはアトリエ）を設立した人々の階層別構成をみると、

第4表の通りである。これによると、綿・亜麻両部門を通じて工場主層＝産業資本家層はほとんどすべて「卸売商人」negociantsおよび「産業者」industrielsの出身者によつて占められている。しかもこの「産業者」の中には既成の織維産業資本家が多数含まれていることを考慮すれば、紡績部門における新興工場主層の圧倒的多数は商人層の転成した者であつたことにならう。ところで、この工場

主層の商人的出自という事実は、紡績業に特有な次のような事情に由来するものであつた。すなわち、生産手段の变革（機械の発明と改良）が急速であつたこの部門では、工場生産力の優位が決定的であつたために、問屋制家内労働、マニユファクチャ等の過渡的生産形態を速やかに揚棄して工場主に推転することが必要であつた。したがつて、紡績企業家たろうとする者は、すでにかなり大規模化していた機械その他の固定設備の建設のために、短期間に多額の資金を調達しなければならなかつたが、工業内部での資本蓄積が未だ不十分な、また資本市場が未発達な当時において、かかる資金負担にたえうる者は富裕な大商業資本家、とりわけ、繊維原料や織物、あるいは種々の植民地物産の取引に従事し、時には金融業をも営むリール市の卸売商人層を措いて他にはなかつたのである。

このようにして、紡績部門における工場制度（「産業資本」の形成が商人層を推進主体として行われたことは、ほぼ疑いのないところと思われるが、この点に関連して更に次の二点に注意を促がしておきたいと思う。その一つは、このように純然たる商人が産業資本家に推転した例が数多

く見出されるとしても、そうした旧き商人層のすべてが、或いはその多数すらもが工業経営に転じたわけでは決してない、ということである。いなそれどころか、伝統的に商業活動に専念してきたリールの大商業資本家は全体としてみれば工業への進出に對してネガティブな姿勢を示したのであつた。^④そしていま一つの重要な点は、一たび工場主に転化した資本家も産業革命期を通じてその地位を保持しえた者は比較的少なく、かれらは絶えず新興のより強力な工場主によつて取つて代わられながら新陳代謝（rotation）をくり返していた^⑤ということである。

次に織布業においては、紡績業の場合とは対照的に、問屋制前貸ないし資本制家内労働が工場制への移行にさいして決定的な役割を果たした。L・ダンセットはいう。「あらかじめ中間段階〔問屋制生産〕を通ることなしに行われる、種々の階層および職業からの機械制織布工場主の直接的補充は、アルマンティエールでは全然存在しないとはいへないまでも、かなりまれなように思われる。」^⑥すなわち、この地方において五・六〇年代に亜麻織物工場主に転化した人々の大多数は、既にそれ以前の時期に家内織布工に對する

第5表 Armentières 問屋織元の出身階層別

階層別	農民	小商人	卸売人	産業家	労働者	官自由	吏・職・業	合計
人数	7	5	7	6	2		2	29

問屋制前貸を通して、また時には小規模な集中職場をもあわせ営みながら、長年にわたつて資本を蓄積してきた「商人・製造業者」negociants-fabricantsであつた。そして、こうした問屋織元の系譜を更にさかのぼるならば、第5表にみられるように、われわれは大商人や産業家とともにしばしば農民層や都市の小ブルジョア層に行きあたるのである。しかもこうした事情はアルマンティエールにのみ特有なものでは決してなかつた。毛織物業中心地ルーベにおいても、小生産者（もしくは小商人）が富裕な織元に経上つた例は数多く見出されるのである。⑤

それ故、織布部門における工場制度（「産業資本」）の形成は、小ブルジョア層の上昇と商人の転化との二様の経路を通じて、かつ問屋織元をその直接の推進主体として、遂行された、といわなければならぬであらう。

以上二節にわたつて検討したところから、われわれはルーレ地方における繊維産業資本確立過程の特質として次の三点を指摘す

ることができると思う。第一は、この部門の産業革命（「工場制移行」）がイギリスの同種産業に比べて三・四〇年遅れて開始され、しかもその進展のテンポがはなはだしく緩慢であつたことである。この点は、一八三〇年頃までに紡糸工程の機械化と工場集中を、また遅くとも五〇年までに織布工程の工場制移行をほぼ完了していたアルザスの綿工業⑥と比べても明らかであらう。第二は、産業革命期における近代的繊維工業の発展が比較的小規模なものに留まつたことである。とりわけこの地方では、主導部門たるべき綿工業のめざましい発展がみられず、それが繊維工業全体の中で支配的地位を占めるに至らなかつた。⑦ 他方、羊毛および亜麻工業（特に織布工程）においては、産業革命が終つた七〇年代になつても農村の家内手工業が広汎に残存していたのである。⑧

そして第三には、工場制度の形成がなかならず、商人もしくは商人的性格の濃厚な問屋織元によつて推進されたという事情が指摘されなければならぬ。この点に、かの産業資本的性格の強い親方製造業者（master-manufacturers）を先頭に産業革命を遂行したランカシャ綿工業との著しい差異が認められよう。産業革命のテンポの緩慢さ、

その発展の小規模性、商業資本の主導的役割という三つの点は、おそらくはフランス産業資本の確立過程に共通する特質であるとしても、リール地方の繊維工業はそれを最も強められた形で示しているように思われる。

さてそれならば、このような特質は一体いかなる歴史的諸条件によつてもたらされたのであろうか。次にこの点が検討されなければならない。その場合これまでわが国において往々なされてきたように、資本主義発展のテンポの問題をフランス革命のさいの土地変革のあり方やその後の時期における農民層分解の停滞という事情にのみ還元することは正しくないであろう。また、ヘンダーソンやあるいはA・L・ダンハム^⑧のように、資本、労働、技術、市場等の要因をたんに並列的に論ずるだけでは十分でないであろう。問題はまさに、北部繊維工業の発展を規定した諸ファクターの内的構造連関を明らかにすることでなければならぬ。次に章を改めて、資本蓄積、生産手段、労働力、市場の四つの側面から、産業革命期における北部繊維工業の発展構造について若干の考察を行いたいと思う。

① Ballot, op. cit., pp. 141-142; Lambert-Dansette, Quel-

ques familles., pp. 155-156. 一八〇八年には、リールに二六、ルーンに一九、ワールコマンに一〇の綿紡績アトリエが存在した。

② Ballot, op. cit., pp. 131, 142; Lambert-Dansette, Quelques familles., pp. 155, 156 n. 82 et n. 83.

③ Lasserre, op. cit., pp. 64, 69; Fohlen, op. cit., p. 238.

④ Lambert-Dansette, Quelques familles., p. 114 n. 5. この小作業場においても、浸水・皮剥ぎ・梳線・紡糸等の部分工程がある程度分化していったと推定される。

⑤ Lasserre, op. cit., pp. 25-28.

⑥ ibid., pp. 52, 72, 113-114, 117.

⑦ Fohlen, op. cit., p. 227 n. 22.

⑧ Lasserre, op. cit., pp. 66-67.

⑨ ibid., p. 64; Roy et Lambert-Dansette, Origines et évolution, Revue du Nord, n° 153, p. 25. 一八三五年に「五〇の紡毛工場中独立のものは一九工場にすぎなかつた。」

⑩ Lasserre, op. cit., pp. 63-64.

⑪ ibid., pp. 10, 64. 羊毛工業諸工程の同一企業内への「統合」が織布工程を起点として行われたことについては、 Cf. Gille, op. cit., p. 91.

⑫ Fohlen, op. cit., p. 238.

⑬ Lambert-Dansette, Quelques familles., p. 202.

⑭ ibid., pp. 48-49, 202-203; Roy et Lambert-Dansette, Origines et évolution, Revue du Nord., n° 157, 1958, p.

63. この問屋織元の営みについて一言すれば、かれらは製織作業は全面的に下請に出していたが、整経等の準備作業は自らの集中職場で行うのを常としていた。Lambert-Dansette, *Quelques familles*, pp. 21 n. 25, 37 n. 12, 203.

⑮ *ibid.*, pp. 57 n. 3, 253 n. 12 et 13; Lasserre, *op. cit.*, pp. 61-62.

⑯ Lambert-Dansette, *Quelques familles*, pp. 204, 207.

⑰ *ibid.*, p. 208 n. 21. ⑱ *ibid.*, pp. 212, 240.

⑲ *ibid.*, pp. 202 n. 12, 203; Lasserre, *op. cit.*, p. 62.

⑳ Lambert-Dansette, *Quelques familles*, pp. 39 n. 14, 62.

㉑ *ibid.*, pp. 50, 60-62, 202-203.

㉒ アトリエ内において端緒的ながら分業が実現されていたことについては、*ibid.*, p. 61 n. 10 参照。

㉓ 問屋織元は上質織は直営作業場で、また素布は家内織布工に よつて、それぞれ製造せしめた。Lasserre, *op. cit.*, p. 62. それ故、「完全に独立な家内労働と……既に賃労働化された家内労働、これらが結局のところ、当時の織布生産の二大形態であつた」のである。*ibid.*, p. 204.

㉔ Lasserre, *op. cit.*, pp. 56, 70; Roy et L.-Dansette, *Origines et évolution*, *Revue du Nord*, n. 148, pp. 205-206; Lambert-Dansette, *Quelques familles*, p. 251 n. 9.

㉕ このことは逆にいえば、本来のマニエフクタチャ段階においては少なくとも紡・織二工程に関する限り、マニエフクタチャ集中職場がけつして全機構的に形成されなかつたことを意味

する。この点については拙稿「フランス革命と初期独占の解 体」(『社会経済史学』二八巻二号掲載予定)を参照されたい。

②⑥ 大塚・高橋・松田編著『西洋経済史講座』第二巻所収の大塚久雄、中木康夫、大河内晩男氏の論文を参照。したがつて、市民革命が直ちにマニエフクタチャ産業資本の急速な展開のための条件を創り出したとみることは誤りである。

②⑦ Lambert-Dansette, *Quelques familles*, chap. II et III; Roy et L.-Dansette, *Origines et évolution*, *Revue du Nord*, n. 153, pp. 31-42, n. 157, pp. 49-69. に基づき作成。これはこの時期の工場設立者中、出自の明らかな者のみを示しているが、大勢を知る上には十分であると思う。なお、同一の資本家が二つ以上の工場を設立した場合は各工場ごとに教えられる。

②⑧ 石けん・機械等の製造業者、燃糸業者 (*bitiers*) の他、既成の紡績工場主で新工場を設立した者が「産業者」に含まれる。

②⑨ Lambert-Dansette, *Quelques familles*, pp. 23, 37-38, 353. かれによると、三〇—四〇年頃二万鍾の大綿紡工場または一五〇〇鍾の小亜麻紡工場を設立するためには六〇万フラン以上の設備資金を要した。これに対して、五〇年頃織布企業の設立に要する資金は問屋制経営(十準備工程集中職場)の場合五—一〇万フラン、力織機八〇—一〇〇台の工場では一八—二〇万フランであつた。*ibid.*, pp. 388-402. これをもつてみても、商人以外からの工場主への上昇が紡績業の場合いかに至難であつたかがわかるであらう。

②⑩ *ibid.*, pp. 226-229, 320, 326-327. ナーヴ・マン・マン
 のことと同様の事情を想定する。Roy et L-Dansette,
Origines et évolution, Revue du Nord, n° 153, p. 153 n.
 40, n° 157, pp. 55-66.

②⑪ Lambert-Dansette, *Quelques familles*, pp. 277, 320-327.
 繊維産業資本家のうち、一八〇〇年以前からの居住者の割合は
 リールでは約五〇%、アルマンティエールでは二八%以下にす
 る。しかも、その中で革命前から繊維関係の事業を行って
 きた者の数は「層少るゝのみ」。 *ibid.*, pp. 298-306; Roy et
 L-Dansette, *Origines et évolution*, Revue du Nord, n°
 157, 1958, pp. 49-53, 60-62.

②⑫ 亜麻紡織に就てみると、三五—八七年に設立されたリール
 市の一〇三の企業中、八七年に同じ社名で存続するものは一九
 企業のみであり、リール周辺とアルマンティエールでも二九—
 八六年に設立された一六四企業中、八七年に存続するものは三
 六にすぎない。 Lambert-Dansette, *Quelques familles*, p.
 145 n° 56 (suite).

②⑬ *ibid.*, pp. 205, 384. 問屋制織布経営は一〇一五—二〇〇年
 もしくはそれ以上の長期にわたって営まれた。 *ibid.*, p. 523.

②⑭ この表は、L-Dansette, *Quelques familles*, chap. II et
 III; Roy et L-Dansette, *Origines et évolution*, Revue
 du Nord, n° 157, pp. 54-69. の分析によるが、第4表と同
 様、網羅的なものではない。また、「農民」の項には、「地主」
 農村ブルジョアが含まれている。

②⑮ Roy et L-Dansette, *Origines et évolution*, Revue du
 Nord, n° 157, pp. 55-56, 66; Fohlen, *op. cit.*, p. 75.

②⑯ Lasserre, *op. cit.*, pp. 75, 185. ただし、織布業において
 企業家層の新陳代謝はきわめて活発であつて、四六年に確認さ
 れた二九人の問屋織元中八〇〇年に工場主の地位にあつたものは
 僅か七人にすぎない。 Lambert-Dansette, *Quelques fami-*
lies, pp. 207-209.

②⑰ Fohlen, *op. cit.*, pp. 212-218; do, *Esquisse d'une évolu-*
tion industrielle: Roubaix au XIX siècle, Revue du Nord,
 1951, p. 94; Henderson, *op. cit.*, p. 102.

②⑱ 一八六九—七〇年における各部門の紡錘数をみると、綿はリ
 ールに四九・五万錘、ルーン・トゥルコワンに四四・七万錘、
 羊毛はルーン・トゥルコワンに五九・二万錘、亜麻はリール、
 トゥルコワン、アルマンティエールに四九・六万錘であつた。
 一方、同時期に全フランスでは、綿紡五七〇万錘、羊毛二七七
 万錘、亜麻五二万錘であり、綿紡部門の支配的地位が確立して
 いる。 L-Dansette, *Quelques familles*, p. 151 n. 66, メン
 デリン『恐慌の理論と歴史』第四分冊、三七八—三八六頁參
 照。

②⑲ 毛織物業については、前出七九頁、註一九、亜麻織物業につ
 いては、Fohlen, *L'industrie textile*, p. 320; Mosse, *op.*
cit., p. 214. 参照。

②⑳ 飯沼二郎「イギリスにおける村落共同体の解体」（清水・会
 田編『封建社会と共同体』所収）六二六—六二七、六三五頁參

照。

⑩ A. L. Dunham, 'The Industrial Revolution in France 1815-1848, 1955, pp. 243-245, 420-426.

三 産業革命期における繊維工業の発展構造

一 資本蓄積 まず、近代の繊維企業の設立と拡張に要する資金がいかなる方法で調達されたかを問題にしよう。

繊維工業における工場制企業が、多くの場合商業資本もしくは問屋織元の個人的蓄積を基にして出発したことは前述の通りである。けれども、繊維企業がたとえばアルマンティエールの Mahieu-Delangre 亜麻紡績工場^⑪（一八三九年）のように完全な個人企業として設立される場合は比較のまれであり、合名会社形態をとるものがより多数をしめた^⑫。しかも、個人企業として成立したのもしばしばその発展の過程において会社組織を採用したから、繊維工業の企業形態としては合名会社が圧倒的多数をしめることとなつた。この形態には、親子、兄弟、親戚等の間の同族的な資本結合によつて成立したものの（リールの Vestrucq 兄弟会社の場合）と、二つ以上の家族、職業の間の資本結合に

よつて形成されたもの（リールの Proniers et Agache 会社の場合^⑬）とがあつたが、重要なのは前者であり、家族的結合の強い北部ではとりわけ広汎に見出される。第二帝政期における合名会社の設立状況をリール郡についてみると、繊維工業を中心として一八五六年に六六件、五八年に六三件、六〇年に八〇件以上、六一年に七五件の多きを数えている^⑭。これに対して合資会社、株式合資会社、無記名株式会社等はこの地方では一九世紀末葉に至るまできわめてまれであつた。

このように繊維産業資本は個人企業もしくは合名会社形態の家族企業として発足したのであるが、こうして成立した繊維企業はその後の発展に必要な資金をも、おもに企业内部の蓄積によつてまかなつたのである。企業が実現した利潤の再投資を通じて経営の拡大をはかるいわゆる「自己金融」 autofinancement の方式は、フォーランのことはを借りるならば「あらゆる家族事業の原則そのもの」であつた^⑮。一八二〇—三七年の間に内部蓄積のみによつてその資本金を約七倍に増大させたリールの Le Blanc 紡績会社、一八六八—八一年の間に資本金を三〇万フランから七

一万フランへと大幅に増加させたアルマンティエールの Coisne et Lambert 織布会社はその典型的な事例である。^⑨

ところで、繊維企業がこうした蓄積様式を採りえたのは、一つには高率の保護関税による国内市場独占がかれらの利潤を高めていたからであるが、他方、この部門においては経営規模が比較的小さく、またその漸次的拡大が可能であったからでもあつた。^⑩しかし産業革命の進展につれて生産設備がますます巨大化してくると、企業の創設・拡張に要する莫大な資金を家族的資本家層の自己蓄積のみからまかなうことは困難となる。とりわけ六〇年以後のように、外国産業の競争によつて急速な設備の拡張と改良が要請される場合には、外部資金の必要は一層増大せざるをえない。^⑪しからば、繊維企業はいかにしてそれを調達したのであるうか。

フォーランはアルザス綿工業の急速な発展を可能にした最も重要な条件として、外部資金の豊富さをあげているが、^⑫リール地方においても繊維工業企業の発展がさまざまな金融機関によつて援護されていたことは疑いが無い。たとえば五八年の次のような史料は、やや漠然とはあるがこの

点を明示している。『北部商業金庫 Caisse Commerciale du Nord（四八年設立）は、リールとその周辺の大・小の資本家、大・小の産業家にとつて有益な機関であり、かれらはその援助（信用）を当にする習慣になつた。』さらに、リールの Rouzé-Mathon, Scalbert, Cavelier-Dathis, アルマンティエールの Pouchain, Woussen 等の個人銀行業者とこれらの都市の紡績・織布業者との間に緊密な姻戚関係が存在し、^⑬あるいはまた、四八年に改組されたフランス銀行をはじめとして、リール銀行（三六一四八年）、リール国民割引銀行（四八年設立）、リール郡割引銀行（五四四年設立）等の株式銀行の大株主の中に Wallert, Droulers, Barrois, Descamps, Dansette 等、リール地方を代表する多数の繊維産業資本家が名をつらねていた^⑭ということも、繊維企業と銀行との密接な金融的結びつきを示唆している。さらにまた、六六一六七年の恐慌の際に、ルーベの Pollet 銀行をはじめとする個人銀行の相次ぐ破産が多数の繊維会社の倒産をひき起こしたという事実は、^⑮銀行信用が産業企業の存立にとつて不可欠のものとなつていたことの何よりの証左であろう。しかしながら、この銀行信用による資本蓄積

には大きな制約があつた。それは第一に、リール地方における銀行の発達が繊維工業の発達に比べて时期的にかなりの遅れを示したことによる。すなわち、この部門の産業革命がすでに七月王政の下で本格的に展開していたにもかかわらず、銀行組織が整備されてくるのは四八年以後、とりわけ第二帝政期のことにすぎず、それ以前には信用機関としては、前述のリール銀行と少数の小規模な個人銀行とを数えるのみであつた。^①そして第二に、より重要なことは、この地方の銀行が一貫して、手形割引と種々の短期貸付、当座預金の開設等を主要業務とする商業銀行であり、ここでは産業企業に対する直接投資や長期の信用授与は副次的な意味しかもたなかつたという点である。^②たとえば、投資金融を正規の業務の中に加えて六六年に設立された「北部工業信用・預金株式会社」（七一年以降「北部銀行」と改称）も、その現実の活動内容においてはほとんど「預金・短期貸付銀行」という性格を保持していた。^③しかも、この長期資金不足を補うものとしての株式発行による資金調達や国家資金の融資は全く例外的にしか行われなかつた。^④このようにみてみると、リール地方の繊維企業者がアルザス

の同業者とは異なり、必ずしも豊富な外部資金を獲得しえなかつたことが理解されよう。それ故、好況期にはともかく、企業の利潤率自体が低下する不況期には、かれらの資金不足は深刻であつた。六七年の一史料は次のように訴えている。『われわれが現在通過しつつある困難な時期に、わが（リールの）工業家達は、必要が生ずれば犠牲を払うイギリス人ほどには多量の資本をもつていないのだ。』^⑤以上に考察したところから、家族的企業の内部蓄積を主とし、銀行信用を従とする繊維工業の蓄積様式は、景気変動に対する企業の対応を困難ならしめることによつて、生産の急速かつ大規模な発展を制約することとなつたと結論しうる。

① Lambert-Dansette, *Quelques familles*, pp. 425-426.

② ③ *ibid.*, pp. 426-429, 434-436. ④ *ibid.*, pp. 427-430.

⑤ *ibid.*, pp. 431-434, 437. 異なつた家族あるいは階層間の資本結合はしばしば東のものにすぎなかつたといわれる。

ibid., pp. 434-435.

⑥ *ibid.*, p. 437; Lhomme, *op. cit.*, p. 172.

⑦ Lambert-Dansette, *Quelques familles*, pp. 438-443, 628; J. Laloux, *Le rôle des banques locales et régionales du Nord de la France dans le développement industriel et*

- commercial, 1924, pp. 134-136. 合資会社を株式会社は合資会社形態の家族的企業が組織を変更したものである場合が多い。
- ⑧ Fohlen, *L'industrie textile*, p. 109; do. *Esquisse d'une évolution*, *Revue du Nord*, 1951, p. 97. 『……工業家達の利益はかれらによつて常にその工業に使用される。商人はかれの財産が十分であると思われれる時には事業から手を引く。これに反して工業家達はかれらのマニファクチュールを殆どすゝて維持するが、それはかれらの家族の財産を形づくめるものなのだ。この財産は父から息子へと伝えられ、世代ごと改良がもたらされるのである』(リール商業会議所の調査、一八六九年)。 cit. Fohlen, *L'industrie textile*, p. 108 n. 34. この文句は自己金融方式と企業の家族的性格を強調している。
- ⑨ *ibid.*, pp. 108-109.
- ⑩ *ibid.*, pp. 96, 99, 108; Gille, *op. cit.*, p. 46; Ch. Morazé, *La France bourgeoise, XVIII^e-XX^e, siècles*, 1947, pp. 139-141.
- ⑪ Lasserre, *op. cit.* p. 189 n.18; Fohlen, *L'industrie textile*, pp. 304, 306, 408.
- ⑫ Fohlen, *L'industrie textile*, pp. 207, 222.
- ⑬ Arch. dép. Nord, 551 M8, cit. Fohlen, *Industrie et crédit dans la région lilloise (1815-1870)*, *Mélanges L. Jacob*, 1954, p. 364.
- ⑭ Lambert-Dansette, *Quelques familles*, pp. 416-418, 421; Fohlen, *Industrie et crédit*, *Mélanges L. Jacob*, p. 363.
- ⑮ *ibid.*, pp. 362, 364, 366; Fohlen, *L'industrie textile*, pp. 418-421. 「リール銀行」は四八年以後フランス銀行に統合されそのリール支店となる。
- ⑯ *ibid.*, pp. 395-399, 408; Lambert-Dansette, *Quelques familles*, pp. 420-421.
- ⑰ Henderson, *op. cit.*, pp. 94, 116; Fohlen, *Esquisse d'une évolution*, *Revue du Nord*, 1951, pp. 97-98. ネーデルラント一八六〇年以前にはいかなる銀行も存在せず、一六〇年に初めてリールの三つの銀行の支店がそこに設立されたにすぎない。
- ⑱ Laloux, *op. cit.*, pp. 110-116, 132, 136, 143; Fohlen, *Esquisse d'une évolution*, *Revue du Nord*, 1951 p. 98; do. *Industrie et crédit*, *Mélanges L. Jacob*, pp. 363-365; Lambert-Dansette, *Quelques familles*, pp. 419 n. 18.
- ⑲ Fohlen, *Industrie et crédit*, *Mélanges L. Jacob*, pp. 366-367. この銀行が産業企業に与える信用は最大限六ヶ月を超えなうとができた。一方、五二年に設立された財産信用銀行 *Credit Mobilier* の投資対象は主に、国債・鉄道・港湾・公益事業及び外国投資であった。 Henderson, *op. cit.*, pp. 146-148.
- ⑳ 国家資金投下の例としては、一六〇年八月に弱小企業を貿易自由化の打撃からまもるためになされた三八四〇万フラン（内、繊維工業に一五〇〇万）の融資があるのみである。 Fohlen, *L'industrie textile*, p. 293.

① Arch. Nat. ABXIX. 1532, cit. *ibid.*, p. 401. 東部では、

銀行の融資が大規模に行われたため、繊維企業はこの恐慌の影響を受けることが最も少なかった。 *ibid.* pp. 113-114, 307-309.

② なぜなら、かかる蓄積様式によつては、好況期に需要の増大に依つて速かに生産設備の拡張を行い、また不況期には設備改良と運転資金の拡充を通じてできる限り従来生産規模を維持しながら、企業存続をはかつていくことは、きわめて困難となるからである。

二 生産手段の供給

工業的可能性の最も重要な決定因子は燃料を含む工業原料の供給に関するものである^①。フランスには工業原料がきわめて乏しかつたので、一八七〇—一九一四年の間、その輸入が総輸入額の約六〇%をしめ、工業製品の輸出額を二五—三〇%上廻つていた^②。こうした事情はそれ以前の時期についても多かれ少なかれ認められる。次にリール地方の繊維工業を中心に、原料および機械の供給状況を概観しよう。

まず繊維原料についてみると、綿花^③はすべて輸入によつており、一八二〇—一五〇年頃には総輸入量の五五—七八%が、六〇年にはその実に九三%（一一・四万トン）までが合

衆国からの綿花によつて占められていた。しかし、南北戦争勃発に起因する綿花飢饉ののちにはアメリカ綿の輸入は大幅に減少し、代わつてインド、エジプト綿の比重が増大する。羊毛^④は五二年には消費量の約三分の二が国産品で占められていたが、時とともに輸入羊毛の比重が増大し、六八年には全体の約四分の三（二万トン）を占めるに至つたとくにルーベを中心とする北部では、世紀の前半においてもオランダ産羊毛がおもに使用され、五〇年代になると近東諸国とモロッコ、さらに南米のラ・プラタとオーストラリアが新たに主要な供給地となる。亜麻^⑤の場合も事情はほぼ同様であつた。五二年には必要量の六〇%以上が国産品によつてまかなわれていたが、六三年以降ベルギー、ついでロシアからの輸入が急増し、六七年には輸入量（三七五〇〇トン）が国内生産量を凌駕するに至る。

このように繊維原料に関しては全体として輸入依存度がかなり高く、しかもその度合は産業革命の進展→原料需要の増大につれてますます強まつていつたといえる。ところでこれらの輸入原料のうち綿花と羊毛とは、一つにはその加工中心（リール、ルーベ等）が輸入港（ル・アーヴル、マル

セイユ)から遠くへだたつていたために、また他方、それが遠方の諸国から、しかも多くはロンドン、リヴァプールという大仲継市場を経由して輸入されたために、陸上および海上の運賃によつてその価格が著しく高められることとなつた^⑦。この点は燃料としての石炭についても同様である。フランスはその石炭需要を国内でみだしえず、三〇年には総消費の二五%、五七年にはその四五%をイギリス、ドイツ等からの輸入炭によつてまかなつていた^⑧。しかるに北部の場合には、かの独占的石炭企業アンゼン会社の要求によつてベルギー炭の輸入に対し通常税率の三倍に上る高率関税が課せられたために、石炭の豊富かつ安価な供給は少なからず阻害された^⑨。四〇—五〇年における新炭鉱の開発の結果、この地方の採炭量はしだいに増加し、石炭価格は下落の方向をたどつたが、それでもなお、イギリスに比べれば約一・五—二倍の高さであつた。その上、急流の乏しい北部ではアルザスやノルマンディとは異なつて水力を動力源として利用しえず、専ら蒸気力に頼らざるをえなかつたから、繊維企業の負担は一層重いものとなつたのである。

以上のように、フランス、とくに北部の繊維工業は原料価格の面でイギリスの同種産業に対して明らかに不利な立場におかれていた。同様の事情は機械についても看取される。周知のように繊維工業に使用された種々の機械は、最初はいずれもイギリスから多大の費用を払つて密輸入され、ついでその輸入機械をモデルに国産化がすすめられた^⑩。三五年にリールの紡績業者 *Strive Lappe* らによつて導入された「ジラール紡績機」はその著名な例であるが、それはイギリスでの約二倍の高価格でフランスの紡績業者の手に入つたといわれる^⑪。しかし、四二年におけるイギリスの機械輸出解禁と、他方国内の機械製造業の発達にもなつて、機械価格はしだいに引下げられていく。いまリール地方について若干の指標をあげるならば、蒸気機関一馬力当りの費用は二九年の二〇〇〇フランから六〇年には六五〇フランに、綿紡錘一個当りの設置費は二九年の三〇フランから四八年には二〇フランに、亜麻紡錘のそれは四二年の四五〇フランから数年後には一四〇フランへとそれぞれ低下を示している^⑫。また前章でのべた四〇年以降におけるリール亜麻紡績業のめざましい発展は、パリの *Decoster* が

アルザスの機械製造業者の手になる国産紡績機の普及によつて可能になつたのである。だがそれにもかかわらず、一八二〇—二二年の関税法以来、外国からの鉄と鋼に対しては、価格の二二〇%にも達する禁止の関税が課せられたことは、フランス製機械の価格をイギリスのそれに比してはるかに高いものにするこゝとなつた。こうした機械の高価格が前述のごとき原料の高価格とあいまつて、織維企業の資金負担を増大せしめつつ、その技術的変革(機械設備の導入と改良)のテンポを相対的に緩慢にしたことは容易に推察されるところである。

- ①② Cameron, *Economic Growth, Journal of Modern History*, vol. 30, p. 7. ヌイニツは工業原料の輸入は総輸入額の五〇%以下、イギリスでは四〇%以下であつた。それはドイツでは工業輸出額にはほぼ等しく、イギリスではその四分の三にすぎない。
- ③ do., *France and the Econ. Development*, p. 14. メンギリンン・前掲書・第四分冊三四六一三五七頁に掲げられた輸出入統計参照。
- ④ Fohlen, *L'industrie textile*, pp. 127-129, 284-287, 358, 362-364, 442.
- ⑤ *ibid.*, pp. 131-133, 364-366; do., *Esquisse d'une évolut-*

tion, pp. 99-100; Henderson, *op. cit.*, p. 163.

- ⑥ do., *L'industrie textile*, pp. 133-134, 366-368; Lambert-Dansette, *Quelques familles*, p. 466. 亜麻の場合には他の二部門とは異なり、一九世紀前半には織糸に關しても外国からの輸入に大幅に依存してゐた。cf. Lasserre, *op. cit.*, p. 243.
- ⑦ Fohlen, *L'industrie textile*, pp. 130-131, 137, 138 n. 46, 365-366. さなみに、ロシア産の亜麻は少なくとも六〇年以降はブランドルのタンケルク港經由で輸入されたから、運賃は相対的に安かつたものと思われる。Lambert-Dansette, *Quelques familles*, p. 460.
- ⑧ Cameron, *Economic Growth*, pp. 7-8.
- ⑨ Lasserre, *op. cit.*, pp. 33-34. 即ち、通常は百キロロにキ一ーサンチームの関税がこの会社の販売圏では三三サンチームに引き下げられたのであり。cf. *ibid.*, p. 193.
- ⑩ *ibid.*, p. 121; Fohlen, *L'industrie textile*, pp. 224, 249; Henderson, *op. cit.*, pp. 157-158. J・タンヤットの計算によれば、イギリスのトン当り炭価一〇フランに対して、北部では一五—二〇フラン、ノルマンディでは二六フランであつた(Quelques familles, p. 479)。
- ⑪ Fohlen, *L'industrie textile*, p. 224; Lambert-Dansette, *Quelques familles*, p. 13.
- ⑫ Fohlen, *L'industrie textile*, pp. 226-227; Gille, *op. cit.*, pp. 88-89; Dunham, *op. cit.*, pp. 247-253; Henderson, *op. cit.*, pp. 100-101. 機械工業は北部でより早くに発展した。

そこではアルザスとは異なつて、繊維企業が機械製造業を兼営した例はごく少数であつた。

⑬ Lasserre, op. cit., p. 26.

⑭ *ibid.*, pp. 26, 28; Lambert-Dansette, *Quelques familles*, pp. 388-389, 393-394, 399, 401.

⑮ *ibid.*, p. 392. 三九年にリールで使用されていたシラール紡績機は殆ど全て国産品であつたが、蒸気機関と伝導装置は四〇年代においても主にイギリスからの輸入に依存していた。

ibid., p. 114 n. 5; Lasserre, op. cit., p. 26.

⑯ Lambert-Dansette, *Quelques familles*, p. 405 n. 38; Lasserre, op. cit., p. 33. この高率鉄関税は五三—五六年頃まで存続する。なお、この時期に安価な鉄・鋼の輸入が必要であつたのは、フランス鉄鋼業が増大する国内需要をみたしえないうのみならず、その生産価格の点でも、原料炭の高価格と製鉄技術の低位との故に不利な立場におかれていたからである。

三 労働力の存在形態 ジルは、フランスにおいて、イギリスにおけるような特徴的な形での大工業の出現を遅らせた一つの要因として、「豊富な、集中された労働力」を獲得することの困難さをあげた後、こう述べている。「さらに、繊維工業が集中という技術段階を求めることが少ないのは、まさに工業活動が農業活動の一個の補充であるような労働力を、繊維工業が自由にできるからに他ならない。」①

すなわち、これにおいては、農村の副業的労働力の豊富な存在こそが繊維工業の分散の生産体制をささえ、その工場集中を抑止したとされるわけである。以下リール地方についてジルの見解の当否を検討してみよう。

まず、一九世紀初頭におけるリール地方の農民層分解の状態を表示すれば、第6表の通りである。いずれの地域においても五—二〇ヘクタール程度の中農層を基軸として明

第6表 Lille 地方農業経営規模別構成(%)

地 域 名	0—1 ha	1—5 ha	5—10 ha	10—40 ha	40—100 ha
Ferrain (7 コミュニース)	68.9 (45)	20.2 (54)	5.4 (50)	5.2 (43)	0.3 (33)
Lille 西方郊外 (4 コミュニース)	72.3 (49)	17.4 (58)	4.7 (53)	5.3 (57)	0.4 (20)
Vallée de la Haute-Deûle (3 コミュニース)	65.6 (79)	25.7 (86)	5.7 (86)	3.0 (95)	0.1 (100)
Mélantois et Carembault (4 コミュニース)	59.0 (64)	29.3 (66)	5.3 (79)	6.1 (82)	0.4 (75)
Pévèle (7 コミュニース)	54.1 (85)	37.5 (88)	5.0 (94)	3.1 (85)	0.3 (60)

()内は自小作を含めて自作経営者の%を示す。

確な両極分解の進行がみられるが、注目すべきことは、二・五（自作の場合）ないし五（小作の場合）ヘクターといふ独立自営の限界規模に達しない零細経営農がきわめて大量に析出されていることである。この尨大な過小農層は農業における賃労働とともに何らかの形で工業労働によつて生計を補充せざるをえない。ところで大革命以前から綿と亜麻の紡績業、亜麻織業、梳毛糸紡績業等がおもに農村工業として発展してきたこの地方では、農民経営内部における農工の結合はいわば伝統的なものであつたが、一八世紀末以来のジェニー紡績機の普及にともなつて農村紡績業はひとときを展開を示し、また一九世紀初頭以来、とくに三〇一四〇年頃からの紡績工程の機械化、織糸生産の増大と飛籽の導入の結果、農村織布業がめざましい発展をとげることとなつた^④。さらにこの過程と並行して、ロシア産亜麻の輸入増加にともなう亜麻栽培の減少、織糸の生産、販売の集中化のために、農民の自家用手工業と独立小営業がしだいに破壊され、問屋制家内労働が拡張していつたが、いづれにしても七〇年頃まで、農村の半農半工の生産者層が繊維工業労働力の重要な構成要素であつたことは疑いをい

れないであらう^⑥。

しかし、一九世紀中葉の繊維工業労働者はもちろん農村の半農半工の職人層（独立小営業者と資本制家内労働者）につきるものではなく、都市のマニユファクチャー労働者、とくに工場労働者のしめる比重がますます増大しつゝあつた。たとえばリールとその近郊では、三五年に三五〇〇人にすぎなかつた亜麻紡績業労働者が四八年には一〇一二〇〇〇人に、また三四四年に三八〇〇人であつた綿紡糸・撚糸工が四八年には約一五〇〇〇人へとそれぞれ増加している^⑦。あるいはまた、ルーベの人口が三一五一年の間に一八一八七人から三四六九八人に、アルマンティエールの人口が五一一七三年の間に八八四〇人から一九〇五五人へといずれも激増をみせたのは、前者は紡毛工および毛織物工の、後者は亜麻織物工の都市（アトリエまたは工場への）集中によるものであつた^⑧。この都市工業プロレタリアートの出自をいま少し詳しくみるならば、それは次の四つに大別される。すなわち、第一に大工業の競争を受けて没落した独立小営業者層 *petit patronat*、第二に主としてリール地方の農村部の、時にはより北方のアズブルック郡の問屋制家

内労働者 *travailleurs à domicile*、第三に専業農民層と

その子女、第四に一八一五年ごろに始まるベルギーからの移民労働者であり、この最後のものは五一年にリール郡だけで五四〇〇〇人の多数に上つた。これをもつてみても、既に世紀の半ばにおいてリール繊維工業がその労働力需要をこの地方内だけでは充たしえなくなつていたことがわかるであらう。

ではこのような労働力の存在形態はこの地方の繊維工業の発展構造をどのように規定していたであらうか。前述のような農業と土地と結合した豊富な過剰労働力の存在は、たしかにいわゆるマニユファクチャ段階における繊維工業繁栄の基盤であつた。それはルーベ毛織物業やアルマンテイエール亜麻織物業に典型的にみられるごとく、問屋織元 (*négociants-fabricants*) に対して低廉な労働力を提供するとともに、他方それを通じて都市アトリエ労働者の賃金水準をも押し下げることによつて、織元層の資本蓄積を著しく容易にしたのである。そして、五〇年頃に始まるこれら問屋織元の近代的工場主への推転は、まさにこのような低賃金労働力の搾取を通じての蓄積資金を基にして行われた

第7表 Lille 労働者の日賃金の変動(フラン)

職 種 別	1835年	1847年 4月	1849年 7月	1856年
綿 紡 糸 工	2,50—3	2,25—3	2—2,55	3—4
綿 燃 糸 工		2,50—3	2,25—3	3—4
綿 織 工	1,50	1—1,50	0,75—1,50	
紡 毛 工	2,50—3,50	0,70—1	2—2,55	
紡 毛 女 工			1—1,40	1,75—1,85
亜 麻 紡 女 工	1—1,25	1,40—1,75	1—1,40	1,75—1,85
亜 麻 織 工		0,75—1,50	0,75—1,50	1,75

の賃金が五六年になると一転して顕著な上昇を示していることは、そうした労働力供給の不足を反映するものと考えられるが、さらに羊毛・亜麻両工業がめざましい発展をとげた六二一六六年には、労働力の不足と高騰を訴える工場のであつた。⑩

しかしながら、小土地所有農を中核とする老大な零細経営農民の存在は、一方においてかれらの家内労働に依拠する問屋織元の工場制移行のテンポを緩慢ならしめると同時に、他方五〇、六〇年代のごとき繊維工業の飛躍的発展期には、工場制生産に必要な自由な労働力の供給を制限することとなつた。⑪

第7表にみるように、四九年まで全体として下落の方向をたどつてきた繊維工業労働者

主の声が至るところから発せられた。^⑭六二年の一史料はこう語っている。『……(休業した綿)紡績工場から解雇された人々は、……機械織布工場に容易に仕事を見つけることができる……。働くことを望む者はだれでも働くことができる。というのも、目下ルーベにはまだ多数の織布工が不足しているからだ。』しかも、こうした労働力需要は農村労働者の都市移動によつてよりも、より多く、ベルギーおよびアイルランドからの移民によつて充たされたのである。^⑮

こうみてくるならば、リール地方の労働力事情もまた繊維産業資本の急速かつ大規模な発展とは相容れないものであつたといわなければなるまい。そこで、最後に、以上の考察を市場構造の観点から総括して章を閉じることにしよ

① Gille, op. cit., pp. 39-40.

② G. Lefebvre, Les paysans du Nord pendant la Révolution française, 1924, p. 952 より作成。なおこの他に「総戸数の一〇—二〇%に達する無経営農民が存在した。」ibid., p. 45.

③ ibid., pp. 284-289; Lambert-Dansette, Quelques familles, pp. 35, 79 n. 11.

④ 前出七五、七七頁の叙述を参照。一八〇一年にリール郡だけで五七の村が綿紡績に従事しており、二五六一台のシムニー機

と六三四台の手紡車が使用された。ibid., p. 152 n. 69.

⑤ Lasserre, op. cit., pp. 35-36.

⑥ 一九世紀中葉については土地所有・経営の分布を統計的に明らかにしないが、一八〇四—一八〇五年の間にリール郡の農工兼営村落の人口が一定であるか、もしくは多少とも増加していることからみると、第6表に示した農業構造に顕著な変化があつたとは考えられな。Lasserre, op. cit., pp. 76-77.

⑦ ibid., p. 74.

⑧ ibid., pp. 74-75; Lambert-Dansette, Quelques familles, pp. 73, 79 n. 10.

⑨ ibid., p. 81 n. 14, p. 82 n. 15; Lasserre, op. cit., pp. 75-77, 115. かかる移民の流入はベルギー経済が危機にみまわれる毎に増加する。かれらは最下層階級の出身で、極度の低賃金にも耐ええたから、フランス人労働者はその競争に苦しむこととなつた。ibid., pp. 115-117.

⑩ 前出八四—八五頁の叙述参照。

⑪ 農村からの人口流出 (exode rural) が緩慢であつたのは、一つにはほぼ一八一五—一六〇年の間農産物輸入関税によつて、小農経営に対しても比較的安定した収益が保障されていたからであり、また二つには、主要繊維部門以外にもこの頃大いに発展した製糖業や、製油業、パチストその他の特殊織物の製造等が、多数の農民に就業の機会を与えたからである。Dunham, op. cit., pp. 180-183; Lasserre, op. cit., pp. 77-78.

⑫ ibid., p. 107 より作成。部門別にみると、羊毛・綿・麻

の順で賃金は低くなるが、この亜麻工業労働力ですらもイギリス繊維工業労働力に比べれば二八%高価であつた（七三年）。
 ibid., p. 108-109, 114; Lambert-Dansette, *Quelques familles*, p. 473 n. 16.

⑬ Fohlen, *L'industrie textile*, pp. 321-322, 340-341.

⑭ Arch. dép. Nord, 653 M30, cit. ibid., p. 340.

⑮ ibid., pp. 321, 341. 六四年にはルーヴに六三〇〇人のベルギー人が移住してゐる。

四 市場構造 フランス繊維工業の市場構造は一九世紀

中葉を画期としてかなり根本的な転換をとげる。その主要な契機となつたのは、一つは四〇年代以降の鉄道網の発達であり、他は六〇年一月の英仏通商条約締結にはじまる自由貿易政策への転換であつた。

ナポレオンの「大陸制度」以来の伝統的保護関税制度の下にあつて、繊維工業は国内市場を事実上独占していた。^①

ところでこの国内市場は、交通手段の未発達な一九世紀前半においては未だ全国的に統一されておらず、それぞれ異なつた価格組織をもついくつかの封鎖的市場圏に分割されていたのである。しかもこの分散的な国内市場は、農民的小営業ないし自給用手工業の広汎な残存と都市人口の増加

の緩慢さとの故に全体としてきわめて狭隘であり、またその重要な販路を農村に求めざるをえない所から、農産物価格の変動によつて売行きがつよく左右されるという不安定性をも包蔵してゐた。^② この点ではリール地方もけつして例外ではない。ここでは、製品の一部はリールやルーヴの卸売商人または仲介業者の手を通じてパリ、リヨンその他の遠隔地に輸出されていたにしても、より多くの部分は生産者たる独立小織元や富裕な織元によつてアルマンティエールや農村工業町の定期市 *foires* にもたらされ、局地内または隣接地域の消費者に販売されていたのである。^③ ところで、そうした地域内販路がいかに狭隘なものであつたかは、早くも四七―四八年にリール繊維工業が最初の過剰生産恐慌にみまわれたという事実からも推察されよう。^④

だがそれにもかかわらず、技術的なお低位にあつたこの時期の繊維工業にとつては、関税障壁に守られた国内市場こそが頼みの綱であつた。というのも、絹織物や上質毛織物のような奢侈品は別として、日常消費品の綿織物や亜麻織物においては、フランスは世界市場において「世界の工場」としてのイギリスに対抗しえないばかりでなく、後

進諸国の同種産業の競争をも蒙らねばならなかつたからである。綿織物の生産額中にしめる輸出額の割合は（植民地向けのものを含めても）四七年二八%、五五年二〇%、六〇年一三%と小さく、しかも年とともに減少している。毛織物の輸出率は綿織物よりも高かつたが、亜麻織物においては三〇―四八年の間輸入額が輸出額を多かれ少なかれ大幅に上廻つており、この部門は未だ国内市場をすら完全に制覇するに至つていない。

ところが、四五年にパリ・リール・ブリュッセル間に鉄道が開通し、さらに四七年にその支線がアルマンティエールとダンケルク港を結ぶようになると、従来なお封鎖的市場圏の性格をとどめていたリール地方は成立しつづつある全国的統一市場の中にしだいにたかく組み入れられていくことになる。その結果はいうまでもなく繊維製品に対する新たな需要の発生であり、それに支えられて初めて五〇年代におけるリール、ルーベ紡績業の生産規模の飛躍的拡大、ルーベ、アルマンティエール織布業の工場制への移行が可能になつたのである。ところで、四〇―五〇年代における鉄道建設が全国市場の形成、販路拡大を通じてフランス繊維

工業の発展と近代化を促したとするならば、六〇年から六五年にかけてイギリス、ベルギー、ドイツ、イタリア等との間に結ばれた通商条約は、フランス繊維工業を世界経済の網の中により深く編みこむことによつて同様の効果をもたらしたといえるであろう。「自由化」に伴い綿糸・綿織物の輸入は六〇―六五年に約二〇〇〇万フラン増加したが、その輸出はこれを遙かに上廻る三七〇〇万フランの増加を示した。しかし、この時期にフランス綿工業が国際競争力をもちえたのは、その生産設備の近代化への努力もさることながら、何よりも綿花飢饉によつてそれまで強大な輸出力を誇つていたランカシャ綿工業が大打撃を受けたからであり、したがつてやがてこうした好条件が失われるならば輸出货量は忽ち減少する。綿花飢饉の影響は羊毛・亜麻工業にも波及し、リール地方を最大の凝集地帯とする両工業は拡大された国内及び国外の市場をめざして生産規模を拡大し、未曾有の繁栄を示した。こうして毛織物輸出額は六四年に三億五五九〇万フランに、亜麻織物輸出額は六六年に二八七〇万フランに達し、いずれも七〇年までの最高を記録する。けれども、相対的に製品コストが高いこれらの

工業は国外ではもちろん国内においても綿工業に対抗して急速に販路を拡大することはできない。六六年以降英仏兩國の綿工業生産がほぼ正常に復するや、早くも六七年前記二部門に過剰生産恐慌が起つた^⑧という事実はそのことを証明している。

いま通商条約と綿業恐慌とが市場構造に及ぼした影響を知るために六〇年と六九年とをとつて輸出額の変動をみるに、綿織物は六九六〇万フランから約七〇〇〇万フランにと殆ど変化がみられず、亜麻織物は一五四〇万フランから一七八〇万フランへと多少の増加を示し、毛織物は二億二九三〇万フランから二億六八三〇万フランへと最も著しい増加を示している^⑨。しかしこの同じ時期に毛織物及び亜麻織物の生産が大幅に増加していることを考えると、こうした輸出増加にもかかわらず、フランス繊維工業の国内市場への依存度には大きな変化がなかつたとみるべきであろう。以上のようにフランス繊維工業は、原料、機械、労働力等の生産諸条件において先進国イギリスに遙かに劣つていたために、産業革命期を通じて国外に広大な輸出市場を獲得しえず、国内市場に主たる基盤をおかざるをえなかつた。

そしてこの国内市場の発達自体が、人口増加の緩慢、農村手工業の広汎な残存のゆえに必ずしも急速でなかつたとすれば、繊維産業資本の発展のテンポ及び規模がリール地方におけるように限定されたものとなつたのも、けだし当然といえよう。

① Dunham, op. cit., p. 330; Lasserre, op. cit., pp. 32-33. 勿論、関税障壁をのりこえて流入する繊維製品がなかつたわけではないが、しかしそれは亜麻糸と亜麻織物をのぞけば取るに足りない額であつた。cf. *ibid.*, p. 243.

② 一九世紀におけるフランス人口の増加率は、英、独、アメリカに比して遙かに低かつた上に、総人口に対する都市人口の比率は世紀の前半を通じてはほぼ一定（約二五％）であつた。Henderson, op. cit., p. 95; Gille, op. cit., p. 41.

③ A. Chabert, *Essai sur les mouvements des revenus de l'activité économique en France de 1798 à 1820*, 1949, pp. 200-213; Lasserre, op. cit., p. 100.

④ Lambert-Dansette, *Quelques familles*, pp. 35, 45-46, 226-229, 464. ⑤ *ibid.*, pp. 494-495.

⑥ Fohlen, *L'industrie textile*, p. 153 n. 105, p. 156.

⑦ *ibid.*, pp. 155-156. しかし輸出品では毛織物は綿織物に遠く及ばなかつた。Lasserre, op. cit., p. 244.

⑧ *ibid.*, pp. 243-244. 亜麻工業が国内市場を制覇するのは五〇年代の前半とみられる。cf. Fohlen, *L'industrie textile*, p.

317.

⑥ Lambert-Dansette, *Quelques familles*, pp. 46, 460 ;

Fohlen, *L'industrie textile*, pp. 126, 157.

⑦ Lambert-Dansette, *Quelques familles*, pp. 464, 509 ;

Fohlen, *Esquisse d'une évolution*, p. 97.

⑧ この「近代化」が著しい企業集中を伴ったこと、とくに綿工業の場合には自由化の影響が綿花飢饉に高騰と時を同じくして現われたために、設備近代化は比較的少数の資本力にすぎた企業のみがなす所となり、多数の企業がその過程で倒壊するか、もしくは有力企業の支配下におとしめられたことに注意すべきである。Fohlen, *L'industrie textile*, pp. 284, 444-449 ; Lambert-Dansette, *Quelques familles*, pp. 483, 498-499.

⑨ Fohlen, *L'industrie textile*, pp. 290-291. なお、英仏通商条約が発効したのは六一年一〇月である。

⑩ *ibid.*, pp. 452-461. ⑪ *ibid.*, p. 292.

⑫ *ibid.*, pp. 316-321, 335-344 ; Lambert-Dansette, *Quelques familles*, p. 466.

⑬ Fohlen, *L'industrie*, pp. 318, 331.

⑭ 羊毛・亜麻製品の生産費を高めているのはとりわけ労賃部分である。たとえば、綿の場合には、紡錘五〇〇または力織機二台ごとに一人の労働者でたりののに対して、亜麻の場合には紡錘五五、力織機一台ごとに一人の労働者を必要とした。かくして亜麻織物の生産費は綿織物の約二倍に達する。毛織物と綿

織物とでは生産費の較差は一層甚しう。Lambert-Dansette, *Quelques familles*, pp. 403 n. 36, 484-487.

⑮ *ibid.*, pp. 482-483, 499-500 ; Fohlen, *L'industrie textile*, pp. 374-375, 399, 408.

⑯ *ibid.*, pp. 442-444. 相手国別にみると、織物輸出が最も多く増加した国々はイギリス、ドイツ、ベルギーであり、逆にそれが著しく減少したのはアメリカである。

四 おわりに

われわれは本稿において、まずリール繊維工業における産業資本確立過程の諸特質を究明し、次いでそれらの特質がどのような諸要因に規定されつつ生起してきたかを考察した。きわめて粗雑な検討に終つてしまつたが、フランス産業資本の発展構造の究明という課題に対していささかの寄与をなしたと思う。

最後に、以上の考察をもとに比較史的観点から一つの展望を試みて結びに代えたい。従来のが国における西洋経済史研究は、産業革命について次の二つの類型を設定してきた^①。一つは、小ブルジョアの生産者層の広汎な成立と分解を起点として産業資本(工場制度)が自生的かつ順調な

展開をとげる産業革命の「イギリス型」であり、他の一つは、そうした小ブルジョア層の発展をみないまま外国資本主義の圧力とそれに対する対抗から、商業資本の産業資本への転化を主軸として非自生的に展開される産業革命の「ドイツ型」である。そして、古典的な市民革命を経過したフランスでは、産業革命もまたイギリス型の正常な展開形態を示したものとされている。だが、こうした類型把握を以てしては、われわれが本稿でとりわけ強調してきたような、フランス産業資本の確立過程にみられる諸特質を包摂していくことは不可能であろう。フランスの産業革命は少なくとも繊維部門に関する限り、イギリスと同様に資本の個別的蓄積と自己金融方式にもとづいて展開したとはいえ、その過程はイギリスに比して著しく困難であった。のみならずこの国では、産業資本形成の小生産者のコースはそのものとして貫徹しえず、商業（ないし問屋）資本が工場制度形成に主導的役割を演ずることとなつた。そしてこうした特殊性を規定した条件としては、何よりも、マニユファクチャ段階における資本蓄積が相対的に低位にあつたにもかかわらず、フランス産業資本はイギリスが到達した高

度の生産力水準を導入するために、その出発にさいして多額の資金を必要とした、という事情が挙げられなければならぬであろう。いずれにしても、フランス産業革命がイギリス、ドイツとは明確に異なつた諸条件（国内のおよび国際的）のもとで独自の展開形態を示したことは明らかである。われわれは、既成の基本論理の貫徹を云々する前に、産業革命の特殊フランス的形態をまずもつて確定すべきではなからうか。^③

- ① 大塚久雄『欧州経済史』一五五—一五六頁、高橋幸八郎「封建制から資本主義への移行、総説」〔『西洋経済史講座』第三巻所収〕、遠藤輝明「産業革命論に関する一考察」〔『歴研』二六四〕。

② 既成の一般概念をもつてフランス産業革命を割り切ろうとすれば、それがもつ多くの重要な側面を見失うことになる。研究の現段階で必要なことは、各国産業革命の特殊歴史的形態を史実に即してできる限り精密に追求することであり、しかるのうちそれら全ての特殊性を包摂する、より高次の「産業革命」概念が構成されるべきである。

〔附記〕 本稿は、京都における産業革命研究会の討論に負うところが多い。記して謝意を表したい。

sure for the former *Dogô* 土豪 and resident subjects, and as a secondary organization in the clan government.

This article pays attention to the role of the *Gôshi* system in the *Tosa* 土佐 clan in relation to the early clan government. The early government, under the subjective or objective conditions, had an important problem of measures against *Hashirimono* 走り者 who originated from burdensome military service of the Shogunate from *Keichô* 慶長 to *Genna* 元和 period; and from *Kanei* 寛永 to *Kanbun* 寛文 period in had a problem to overcome the inner contradiction of the clan system. The role, played by *Gôshi* consistently accentuated the intensification of local government, divided into three functional patterns of *Shôya* 庄屋 or country officials, local officials, and early clan merchants, in various aspects. The important role of *Gôshi* in the early *Tosa* clan government was due to the subjective cause of quantitative scarcity of feudal subjects and to the objective cause of low productive power owing to narrowness of cultivated land and width of forest.

The Textile Industry in Northern France in the Period of the Industrial Revolution

by

Haruhiko Hattori

Though the French Revolution was the most perfect bourgeois revolution, why didn't the subsequent development of the French capitalism go on smoothly? This is the problem which is long treated by many students and is not completely solved.

This article considers this problem through the history of the French industrial revolution. After the limit of our consideration was confined to the textile industry of Lille district in northern France, at first we analyse transition epochs and forms of this section to the factory system and explain concretely the characteristics of forming process of the industrial capital in textile

industry — that is, slow tempo of the development of industrial capital, narrow scale of its development, and leading part of merchant's capital. Then, we consider by what objective conditions these characteristics were regulated, through the four aspects of way of capital accumulation in the textile industry, supply of means of production, form of existence in labour power, and market organization, which is to throw some light on the peculiar developing structure of the French industrial capital.

Forms of Usufruct in Fishing-ground of Private
Fishery Right in the *Setonaikai*
(Inland Sea of Japan)

by

Michihiro Kôno

Usufruct forms of inshore fishing ground at the end of *Meiji* 明治, were regulated by exclusive fishing right, common of fishery therewith, and terms on the bill of exclusive right. Among these usufructs customary exclusive right of fishery, as the former opinions went, almost completely succeeded that of the late Shogunate period, but exclusive right of the surface on the coast was given to each local fishing village by dividing the surface area into pieces.

In fact, after the Imperial Restoration, fishermen amended many for themselves and the distinction between these two rights is not so clear. Then this article explains the classification from the two points: (1) whether it was individual or common usufruct, (2) limit of usufruct was to the coastal surface or only to the offing or both the coastal surface and the offing; and considers their meaning by studying how the common of fishery and fishery on terms were executed.

In conclusion, at the end of Meiji few fishing villages could no longer monopolize a large water area, but common usufruct of many villages over the wide area was a natural phenomenon,